

10. 「日本史探究」の教科書をよむ(3)―近世①

2025.12.12. 大橋 幸泰

はじめに

第一学習社版「日本史探究」の教科書における叙述を材料に、現在の歴史学との関係を読み解く

→本日(と次回)は、近世を対象

1. 江戸幕府の成立と日本列島

【注目史料】

・アイヌと和人の儀礼(オムシャ)、琉球使節江戸登城行列図 pp.124 / 日本列島の周縁

→和人と異民族・異国との関係／尊卑上下の秩序 pp.124(本文)

* 江戸幕府は日本列島をどのように編成替えしたか？

17C東アジア国際秩序の変容／中国における明清交代、日本における自力救済から惣無事への転回

→関ヶ原の戦いの勝利(1600)により、公儀性を奪取した徳川家 pp.122-125

a.公儀性が高まった幕府のもとに、諸大名を編成替え／大名とともに領民も分断統治／身分別支配を基本

b.幕府への権力集中にともない、蝦夷地・琉球を周縁化／日本型華夷秩序の形成

* ただし、すべてが上意下達の一時的支配が貫徹したのではない／領主・領民とも、それぞれの組織は自律的に運営されるのが原則／紛争は上位の裁定に委ねさせる／このシステムにより、蝦夷地・琉球を含む近世日本における惣無事が保証される

ただし、近世日本の惣無事は徳川家の武威により維持／したがって、将軍家の武威が廃れれば、徳川家による惣無事は危うくなる

* 17C 中、清に抵抗する明の遺臣からの援兵要請に対して、幕府は拒絶／徳川家の武威が傷つくのを回避→蝦夷地・琉球は「異域」／領域としての境界／幕府にとって防波堤／曖昧性の保持

* 日本型華夷秩序のもとに周縁化された一方で、独自の生活・文化が存在／自律的に運営 pp.124-125

2. 近世の対外関係

【注目史料】

・19C 前の長崎港(川原慶賀「長崎港図」) pp.127 / 出島とオランダ船、唐人屋敷と中国船

→近世日本の対外関係が限定されていることを象徴／最大の契機はキリシタンの遮断

* 近世日本の対外関係は、どのような経緯で「鎖国」と認識されるようになったのか？

17Cに整った四つの口／松前口(対アイヌ)、対馬口(対朝鮮)、長崎口(対中国・オランダ)、鹿児島口(対琉球)

* それぞれ個別に成立／当初から幕府がそのように企図したものではない pp.126-127

→ 18C 後、ロシアの接近により、幕府は対外関係のあるべき状態について考えることを強いられる／それはいつ、どのようにして認識されたか？

* 工藤平助『加摸西葛杜加国風説考』(1783、のち『赤蝦夷風説考』として流布)／当初、カムチャッカ半島人の動向に注視／遠い外国であると考えられていたロシアが、蝦夷地を挟んで隣国となったことを認識 pp.148-149

→志筑忠雄『鎖国論』(1801)の登場 pp.127 / 近世日本の繁栄はヨーロッパとの関係を断絶したことによるものとの認識／以後の日本の対外関係は、ロシアの脅威にどのように対応するかが最大の懸案事項

* 近世日本(治者)の対外認識が転換する契機／主軸がアジアから西洋へ

3. 近世の宗教世界

【注目史料】

・『島原記』 pp.128 / 島原天草一揆が起こったのは「所守の政法軽弱たるゆへなれば」
→ 島原・天草の領主の責任とされる / その内容は経済政策と宗教政策 / ここでは、宗教政策のみ注目 (経済政策については次回)

* その後の近世社会にどのような影響が及ぼされたか？

近世は宗教統制の時代とのイメージ / 厳しいキリシタン禁制政策の他、本末体制の構築
→ 世俗権力が宗教を統治 / かつては、古代・中世と比べて合理的精神が涵養されたとの理解
* しかし、寺社・宗教儀礼は継続 / 東照大権現や藩祖を祀る行為 pp.128-129
→ 近世期、宗教の役割は減じていない / 神仏習合のもと、多様な宗教が存在

島原天草一揆後の宗教 / 宗門改の制度化 (1660 代) により、世俗権力により恒常的な管理へ
* 宗門改とは、檀那寺を確認することにより「切支丹」でないことを証明する制度
→ 「切支丹」でなければ、許容される / 檀那寺の仏教活動の他、神祇信仰・陰陽道・修験道・加持祈祷・民間信仰・流行神など、近世人は多様な宗教活動を実践
* 「邪」 = 「切支丹」 / 明快な「邪」に対して、曖昧な「正」 / 島原天草一揆の強烈な印象が、近世的「邪正」観を創出 / 神仏習合の原則のもと、宗教活動の序列も曖昧

近世期、豊かな宗教活動の実態 / 禁制宗教のキリシタンさえ幕末まで生き延びる (潜伏キリシタン) pp.178
* 明快な「邪」である「切支丹」 / 18C 以降、理解不能なものは何でも「切支丹」とされる pp.128 / その一方で、現実の潜伏キリシタンは近世秩序に忠実にしたがって生活する百姓
→ 貧困化したイメージの「切支丹」でないとなさされれば、実際の潜伏キリシタンを含め、宗教活動は共存
* 明治政府による神仏分離の強行 / 神道の優越性のもと、「邪正」が逆転 / 曖昧な「邪」に対して、明快な「正」 / そこから逸脱する宗教は弾圧される / 大日本帝国憲法における「信教の自由」の内実

4. 留意すべき点

近世は権力集中が実現した国家が成立した印象 / 一方で、多様性・自律性が維持された社会が持続
* この状態を維持するため、排除するべき「切支丹」という共通の絶対的「邪」の存在
→ 対外的にも対内的にも、幕府は分断統治を徹底 / a. 自国と外国を分断、b. 宗門改により被治者の宗教活動を管理 / 近世前期では殉教者を多数創出、近世後期では近世秩序から逸脱する存在を排除、という不幸

おわりに

治者 / 分断を志向 ←→ 被治者 / 生活が脅かされない限り、共存を志向

【参考文献】

山本博文『鎖国と海禁の時代』(校倉書房、1995年)
藤田覚『近世後期政治史と対外関係』(東京大学出版会、2005年)
岩崎奈緒子『近世後期の世界認識と鎖国』(吉川弘文館、2021年)
大橋幸泰『近世日本邪正論江戸時代の秩序維持とキリシタン・隠れ / 隠し念仏』(勉誠社、2024年)
牧原成征編『日本史の現在 4 近世』(山川出版社、2024年)

【付記】

・明日までに、Waseda Moodle にて講義記録の提出を求める。
・小レポート提出期限 2026 年 1 月 15 日 / 小レポートを提出した者が試験 (2026 年 1 月 23 日) の受験資格を有する。